THE ANNUAL REPORTS OF
HEALTH, PHYSICAL EDUCATION
AND SPORT SCIENCE
VOL.40, 51-57, 2021

原　著

1900年代から1940年代の日本で『易筋経』と『陰符経』が誤解された経緯

The Background of the Misunderstanding of "Yijin Jing" and "Yinfujing" in Japan from 1900s to 1940s

目　野　由　希

Yuki MENO

ABSTRACT

After the Boxer rebellion in China in 1900, some Japanese military officials were interested in the stunning power of the Chinese traditional boxing which enhanced Chinese nationalism and defense ability in those days.

Although, the Japanese officers misidentified the Chinese classic boxing as Shaolin Temple Boxing/少林寺拳法 and misunderstood the book for its theory and training as "Yijin Jing/易筋經", the Japanese military reservists and their family members at the time obtained a copy of "Yiji jing" in the continental China, referred from the Boxer rebellion and introduced it to Japan in 1920 as "Higher Knowledge：Spirit and body training technique/Jinzu Jizai：Reiniku Shuyou/神通自在 霊肉修養".

However, the above Chinese boxing which developed popular nationalism in China during the Boxer rebellion was not Shaolin Temple Boxing but Plum blossom martial art（梅花拳）and its textbook for its basic theory is not "Yiji jing". Moreover, in the 1910s, there was a tendency of the times in which Taoist vocabulary was often used to explain bioenergetics in folk psychotherapy in Japan.

As the result, "Higher Knowledge：Spirit and body training technique" introduced multiple incoherent ideas such as the Boxer rebellion, the bio-energy from "the Spirit of the Universe", martial arts, spiritual exercise and Zen Buddhism and developed confused explanations for "Yiji jing".

Furthermore, Kōda Rohan/Shigeyuki（幸田露伴/成行, 1867 - 1947), one of the authors of above adaptation, interpreted "Yiji jing" as similar to "Yinfujing/陰符經". At the same time and later, Japanese army reservists, including Mori Ōgai/Rintarō（森鷗外/林太郎, 1862 - 1922）also showed interest in "Yinfujing/陰符經".

As the result of above misunderstandings, it gradually began to be misunderstood by some Japanese as "Yiji jing" and "Yinfujing" were the texts that had some relationships with a lot of notions such as Chinese alchemy, an ancient Chinese

国士舘大学体育学部（Faculty of Physical Education, Kokushikan University）

school of military, a bio-energy and spiritualism. For example, Rohan often published his Taoist theories which was similar to “Higher Knowledge : Spirit and body training technique” and included Chinese alchemy, spiritualism and yoga in the influential magazines in the 1930s and 1940s.

In 1947, Rohan died. Then, within the year, “Shorinji Kempo”（the Japanese reading of “Shaolin Temple Boxing/少林寺拳法”）organization was founded in Japan as a religious confraternity that performed a kind of gymnastic exercise called “Eki kin gyou/易筋行”（Original read is “Yijin Jing/易筋經”）. Then, the organization started teaching people not “Eki kin gyou” but martial arts. In addition, in order to grow the organization, they added new story that the founder of them learned the Chinese orthodox pugilistic skills during the Boxer rebellion when he worked as the special mission of Japanese secret military agency into their organization history.

The purpose of this paper is to examine the special Japanese concept in which “Yijin Jing/易筋經” and “Yinfujing/陰符經” have idiosyncratic relationships with Chinese alchemy, an unique way of health management in those days, oriental martial arts, classic intellection of ancient Chinese stratagem and spiritualism, occurred from 1900s to 1940s.

Key words; Yijin Jing, Shaolin Temple Boxing, Kōda Rohan, Yinfujing

1．研究の目的と方法

1947年に創設された少林寺拳法は、創設者の宗道臣（＝中野理男）により、「易筋行」に由来する団体と説明される場合がある。この団体が創設時、「易筋行（えききんぎょう）という体操のようなものをする宗教」[1]の宗教団体として登記されたという説明も、その一つである。

この「易筋行」という語は、『易筋經』（えききんきょう）に因む新語と考えられる。同書は、インドの達摩大師が中国に伝えたとする健康法、また身体論だ。たとえば宗の著書『少林寺拳法教範』の第三章「中国の拳の諸相と実態」では、第二節が「易筋經について」というものである。

この第二節とは、『易筋經』を初めて本邦へ紹介した翻案『神通自在　霊肉修養』の説明箇所だ[2]。だが『易筋經』も『神通自在　霊肉修養』も、拳法の指南書ではない。宗自身も、『易筋經』を「道教の不老長寿法の焼直しや、神仙術や陰陽論に似たことを、雑然といろいろと書き、呼吸法や薬湯の用い方などを静功と称して書いているのである。／そして、次に動功と称して別掲のような体操の如き動作をのせている。（中略）易筋經義の十八勢は、その説明にある如く、皮と肉の錬成法にすぎず、格斗技ではない」という[3]。

それにもかかわらず、なぜか宗は『易筋經』に似た「易筋行」という新語を作った上、『神通自在　霊肉修養』の「神仙術や陰陽論に似た」「雑然と」した要素をわざわざ加え、この新語を「少林寺拳法」という「宗教」団体の設立根拠とした。

彼は、なぜそんなことをしたのだろう。その本当の理由は分からない。ただ、「1900年代から1947年までの日本陸軍関係者の中国への関心と道教理解」「1900年代から1947年までの日本の民間精神療法と道教理解」の二点から、その背景事情は説明可能だ。

本論は、上記についての考察を目的とする。本論は日本近代文学会パネル発表「鷗外と露伴の道教――受容過程の謎を考える」[4]に加筆したものである。

2．『神通自在　霊肉修養』

達摩大師著・吉田正平訳『神通自在　霊肉修養』（広文堂書店、1920）は、『易筋經』の翻案である。三つある序文の、最初の「序」は幸田露伴が書いている。露伴はここで、『易筋經』を「李筌の陰符經、張商英の素書の如き也」[5]と評価する。吉田正平「自序」はこれに続き、露伴、露伴の実兄である日本帝国海軍予備役の郡司成忠からの依頼と、天津駐屯軍通訳官だった酒巻貞一郎の協力の下、『易筋經』を刊行したとする（ルビ除く）。

先歳支那に再遊せんとするや、先覚郡司大尉成忠氏予に告ぐるに支那に一大奇書あり。易筋經と稱す。傳説には岳飛将軍之を修めて強く、又北清事變の頭目之を學びて强かりしと。實弟幸田露伴此書を需めんと欲して未だ得ず。思ふに支那河南省少林寺に赴かば寫本あるべし。君乞ふ之を携へて來れと。（中略）直ちに寫書して露伴先生に郵送す。再讀三讀するに隨ひ、所謂不立文字なるを識る。蓋し坐禪の素養ある者に非らざれば其意味は徹底すること能はざる可し。（中略）時運の前途波瀾重疊の秋に際し、本書に因りて強健無比の心身を練達し以て衆凡に超越するは實に緊要中の緊要なり。終に一言を附す。本書を譯述刊行するに際し知友鷗公酒巻君が多大の援助を與へられしことを茲に感謝す。

逸外居士　吉田正平　謹記[6]

郡司は、当時は予備役である。が、彼は1915年、参謀本部第二部の指令でシベリアに赴いている。また、郡司と露伴が『易筋經』に関心を示した契機が、1900年の義和団事件の際、拳法（＝義和団拳）が用いられたからという点も、吉田「自序」は隠さない。

酒巻貞一郎は、1899年から1911年に、広島の海軍兵学校教官だった人物だ。1911年に上京し記者になり、1913年に『支那分割論』（啓成社）を刊行。翌1914年、天津駐屯軍の通訳官となった。この天津駐屯軍とは、義和団事件を契機に編まれた日本軍である。

3．1900年代からの日本の軍人らによる道教への関心

このように、1920年刊行の『神通自在　霊肉修養』とは、1900年の義和団事件と義和団拳に関心ある日本軍関係者とその家族が、中国で少林寺拳法の基礎文献を探した結果、『易筋経』がそれだろうという解釈に至り、『易筋経』を本邦に紹介した翻案である。

日本陸軍予備役が、こうした事項に興味を示す例も、1918年と1927年にも確認できる。1918年の例が、当時予備役の森鷗外（森林太郎（1862-1922）、作家、軍医）だ。

「鷗外文庫書入本画像データベース」[7]は、森鷗外の蔵書のなかで、書入れのある本を調査した結果を公開している画像データベースだ。ここで確認できる鷗外所蔵文献のうち、『陰符經解』の解題を、合山林太郎が担当している。合山は『陰符經』を、「道家の思想を取り入れた古代の兵法書」「巻尾に「戊午十月十日湛校」と記されていることから、大正7年（1918）、鷗外57歳、帝室博物館総長兼図書頭時代の書入れ」と解説する[8]。

この『陰符經』とは、露伴が1920年に『易筋經』を「「李筌の陰符經、張商英の素書の如き也」と評した、その『陰符經』である。1918年に鷗外が『陰符經解』に書入れをして、露伴も1920年に『陰符經』にふれているのだ。

1926年からは、当時の鷗外と同じ日本陸軍予備役の山縣初男が、老子と易経、雲南省研究の成果を刊行し始める[9]。山縣初男の関心は、1938年10月から12月に、雑誌『革新』に「雲南」を連載し、並行して道教論も著した露伴の関心と、軌を一にしている。

1910年代から1920年代は、日本では近代的な道教研究は未発達ながら、民間の図書館の道教関

係文献が増え続けている。当時の日本は中国占領を継続し、中国理解のための道教や儒学理解の需要が高まって、関係する図書館蔵書も増加していた[10)]。

4．1900年代以降の道教への関心に伴うスピリチュアリズム

次に注目したいのが、『神通自在　霊肉修養』の吉田「自序」が、「坐禪」「深遠微妙の哲理」など、日本軍強化にも中国研究にもつながらない結論に到っている点である。

この点は、吉田「自序」続く酒巻貞一郎の「霊肉修養　神通自在序論」で、より明確になる。酒巻はここで「宇宙の精氣」「地球の磁力」と「個體」との関係を論じ出し、座禅や不立文字や磁力、原子論を42頁にわたって述べ、「心的學問」で論を結ぶのだ。

酒巻「霊肉修養　神通自在序論」後半は、ほぼスピリチュアリズムだ。

> 故に若し吾人が一切の煩惱を驅除して、無明の纏綿附着を解き、以て阿黎耶の眞光を輝さば、吾人は宇宙の大精神と交通、融合するを得べし。既に大宇宙と融合す。是凡體にあらず。宇宙の神力は茲に顯現して三世を通觀し、一切の衆生を濟度するを得べし。況や自己の個體をや。此時彼は自己なく、境涯なし。一切の力を具足して眞の神通自在を得べし。是皆修行の功に由るなり。（中略）然れども物質的に無智の世界は精神的に進歩するやも知るべからず。人は科學の研究にのみ熱中するが故に心的學問の研究を疎かにす。若し科學的智識が退歩して、形而下に屈託することなければ、形而上の學問油然して起るなからんや。現代科學の研究の爲に破壞されたる宗教上の信仰も、形而下智識の退歩と共に勃然として起るやも知るべからず。（中略）友人吉田正平氏は野狐禪なり。然も或程度まで宇宙の精氣と接觸し、凡人の爲すべからざることを成せり。氏は嘗て其郷里伊勢の松坂の養泉寺に於て水野良英師に就き佛教を學び頗る得度する所あり。又鬻に郡司大尉の言を聽きて、易筋、洗髓の二經を上海に求め、歸來熟讀精讀、又實地に之を試み、頗る妙處に達せりと云ふ[11)]。

『易筋經』の翻案の題名が『神通自在　霊肉修養』となった理由は、上記引用の、「眞の神通自在を得べし」という箇所に由来するらしい。

実は、1920年刊の『神通自在　霊肉修養』のこの特徴（＝道教とスピリチュアリズム、宇宙論他の複数概念の混交）は、1930年代以降の露伴の道教論の特徴に直結している[12)]。さらに、上述の鷗外や山縣初男も、当時以降、酒巻や露伴と似た傾向を示す。

1915年の森鷗外の短編小説「魚玄機」のテーマには、道教の「房中」、雑誌連載中の小説「雁」の1915年発表分には『素問』『難經』と、道教の「医經」が含まれる[13)]。1916年に鷗外が発表した短編小説「寒山拾得」「寒山拾得縁起」では、道教の「神遷」と医療の「經方」にあたるテーマが扱われる。

つまり、鷗外は方技略の「神遷」「医經」「經方」「房中」の四つ、道教の四つの「方義」（＝道教そのものではないが、道教のうちの実践的技能）を、1915年から翌年にかけて、小説化していたこととなる。

山縣初男は、東京の出版社からは、1939年に著書『新支那案内記』（万里閣）など、中国通の陸軍予備役らしい書籍を刊行している。ただ、彼はこれとともに、1920年に創設された新興宗教団体「神道天行居」を出版地・出版社として、『霊魂世界』（1929）という訳書など、スピリチュアリズムに関する数冊の本を刊行している。

5．民間精神療法につながる1900年代以降の道教理解

確かに、義和団事件と義和団拳は、道教思想と

無関係ではない。ただ、実際に義和団事件と直接の関係があった拳法とそのテキストは、少林寺拳法と『易筋經』ではなく、梅花拳と『根源經』だろう。この点は、すでに佐藤公彦があきらかにしている[14)]。

1900年の義和団事件は、それまであまり関心を持たれてこなかった中国の伝統的な拳法と道教に、日本人の関心を向かわせた[15)]。ただ、道教に縁のある少林寺拳法ならば、日本では近代以前から稗史小説によって知られていた。だから、義和団事件で道教と拳法に注目した1900年の日本人が、まず少林寺拳法と『易筋經』にあたるのはおかしくない。

では1900年以降の、中国拳法と道教への日本人の関心が、なぜスピリチュアリズムに傾いたか。これは、当時の複数の事情が作用した結果と考えられる。

幸田露伴と森鷗外が、1918年から1920年頃、ともに注目した『陰符經』については、そもそも「兵家」（＝用兵や戦略）であるという見方に、再考の余地がある。

松本浩一は、『陰符經』が「兵家」という見方を否定していない。が、彼は同時に、このテキストが「金丹道」（＝霊薬錬成など薬学、化学、気功につながる道教思想の一種）で、書誌的に『周易参同契』と連続しているという[16)]。『周易参同契』とは、雑誌『思想』（岩波書店）の1941年9月号・10月号掲載で、露伴が「仙書参同契」で論じた、「金丹道」で著名なテキストだ。

1910年代に『陰符經』に関心を示した鷗外と露伴は、中国拳法と金丹道に、「気」の思想を介した、何かしらの相関を予期しつつ文献を読んだ可能性は考えられないか。

なぜなら当時は、日本の民間精神療法では東洋の伝統的養生論が復権し、道教、神道、儒教、仏教にまたがる「気」の思想が復活した時期だと、田野尻哲郎が指摘するからだ[17)]。さらに田野尻は道教の「方義」のうち、「神遷」と「經方」を、1910年代大都市圏の教師や軍人が、民間精神医療として受け止めたとする。特に1910年代の道教関係語彙は、日本の民間精神療法でオカルト的な治療の、生体エネルギー説明（＝酒巻貞一郎による「霊肉修養　神通自在序論」説明）に用いられた点は重要だ。

さらに、1910年代の同時代文化として、1910年の和田啓十郎『医界之鉄椎』刊行が、昭和期の漢方復興への最初の狼煙になった点は忘れてはいけないだろう。

『医界之鉄椎』とは、漢方と漢薬を支持し、西洋医学を痛烈に批判した本だ。同書は『時事新報』『東京朝日新聞』『日本及日本人』『萬朝報』『二六新聞』『大和新聞』紙上で激賞され、大いに流布した。さらに同書では、鷗外の長年の上官で、かつ難しい関係にあった石黒忠悳が名指しで正面から批判され、そこも同時代をにぎわす話題となった。

さらに翌1911年には、官学を嫌って東京高等師範学校への招聘を拒否した、在野の思想家の遠藤隆吉が『陰符經』を刊行した。遠藤は『陰符經』「序言」で、本書は僅か四百四十四文字の文章なれども古來道家の金科玉條として尊重する所なり。陰符經と言ふは陰は暗默の意にして符は符合の義なり。即ち造化の理に默契するを言へるなり。去れば此書は人間が造化の理を得て其儘に實行することを主としたるものと謂ふべし」と説く[18)]。そして、同書は『陰符經』を「道家」とはするが、「兵家」とはしていない。

ここに、さらに1913年4月20日『読売新聞』記事、宮内省図書寮編集宮・本田辰次郎「道蔵經に就て」（『読売新聞』）が登場する[19)]。

鷗外と露伴が、それぞれ1918年と1920年に『陰符經』に言及するに至る経緯には、こうした背景があったのである。

6．1920年代から40年代の日本の道教理解

こうして1920年、『易筋經』を「宇宙の神力」

「宇宙の精氣」に通じる生体エネルギーで説明する『神通自在　霊肉修養』が刊行された。森鷗外は1922年に没し、1920年代後半からは、上海の涵芬楼による白雲観版『道蔵』刊行（1926年）、雑誌『支那学』刊行開始（1926年）、湯本求真『皇漢医学』発表など昭和期の「漢方復権」開始（1927年）、日本陸軍予備役の「志那通」山縣初男による『老子と易經の新研究』（大坂屋號書店、1927）刊行という時代が到来する。

道教とスピリチュアリズム、宇宙論他の混交は、1930年代以降、いっそう加速する。幸田露伴は、1933年5月に「道教に就いて」『哲学』（岩波講座）、1936年7月「道教思想」『東洋思潮』（岩波講座）発表後、1941年に『陰符經』と関係ある金丹道の古典『周易参同契』を論じる、「仙書参同契」を雑誌『思想』に掲載したのだ。

上記の雑誌では、露伴はメスメリズム、ヒプノチズム、トランス・ヒマラヤン派神智学、霊界との交通、催眠術、民間精神療法の呼吸法、ヨガと道教の比較、神智学と、やや無節操なほど、雑多な複数概念を道教と絡めて議論する。露伴のこの雑多さ、オカルティズムへの傾斜は、『霊肉修養神通自在序論』の雑多さ、オカルティズムと通じる。

1945年には日本が敗戦を迎え、1947年7月30日には露伴が没した。

すると、露伴が没したおよそ三か月後の1947年10月25日、宗道臣（当時はまだ中野理男）が、「易筋行という体操のようなものをする宗教」を、香川県多度津町に金剛禅総本山少林寺拳法として創設した。「さらに、昭和二十六年、私は縁あって京都達磨寺の後藤伊山（ごとういざん）禅師の法弟となった。そして、宗教法人法の成立と同時に、無宗派単立法人として認証を受け、総本山少林寺として再発足したのである。」[20] と宗は語る。

1945年から1950年頃には、「敗戦ショックの克服」「宗教団体法から宗教法人令・宗教法人法」「脱税ないし節税目的の宗教法人化」[21] の三点が動機付けとなり、多くの新興宗教団体が誕生し、新宗教ラッシュといわれる時期になった。この三点のうち、前二者と1947年当時の少林寺拳法の創設がいかに深く関係しているかは、宗道臣『秘伝　少林寺拳法』（光文社、1963）中に、詳しく活写されている。

特に、敗戦ショックの克服については、宗は1928年来の日本軍の特務機関での中国体験、そして帰国後の混乱を生き抜く経験を「拳法」から語られている。この「拳法」を中国で学んだとする宗は、彼の師について、次のようにいう。「陳老師は、「在家裡（ザイジアリー）」という秘密結社の師父（数千人の門徒を有する幹部）で、少林寺に源を発する拳法の一派である白蓮門拳（びゃくれんもんけん）の師範であった。義和団事件以後、地下に潜行されていたのだそうである」[22]。

しかし、前述のように義和団事件は、少林寺拳法と直接の関係はなく、この事件における中国の民衆運動、民衆ナショナリズムを高めた拳法は梅花拳である。また前述通り、1920年『神通自在霊肉修養』は『易筋經』の翻案として成立し、1900年代から40年代にかけてのスピリチュアリズムや金丹道、民間精神療法などの時代性を色濃く反映している。

その結果、1955年の宗道臣著、総本山少林寺管長秘書室編『少林寺拳法教範』（日本少林寺拳法連盟、1955）では、拳法のテキストとしては不適切かつ不要な『神通自在　霊肉修養』を、それと分かった上でわざわざ紹介し、さらに『易筋經』の紹介する技法を「格斗技ではない」と指摘するに至った。

これは、『陰符經』と『易筋經』を、兵家と金丹道、さらにスピリチュアリズムに、同時に関連づける特殊な読み方が、1900年から1940年代にかけ、我が国でなされた結果として、発生した出来事なのではないか。

以上が、1940年代後半から50年代にかけて、わが国で『易筋経』と『陰符経』が誤解された経緯ではないかと考えられる。

参照文献

1．合山林太郎「〈資料紹介〉青少年期の森鴎外と近世日本漢文学―鴎外文庫の蔵書調査から得た知見を中心に―」『文学』（岩波書店、8巻2号，2007年3・4月）．p.148-155.
2．瀬里広明『露伴と道教』（海鳥社、2004）.
3．栗田英彦、塚田穂高、吉永進一『近現代日本の民間精神療法：不可視なエネルギーの諸相』（国書刊行会、2019）.
4．瀬里広明『文明批評家としての露伴．東京』（未来社、1971）.
5．瀬里広明『幸田露伴と安岡正篤：東洋と西洋』（白鴎社、1998）.

1）宗道臣『秘伝　少林寺拳法』（光文社、1963）．98p.
2）宗道臣著、総本山少林寺管長秘書室編『少林寺拳法教範』（日本少林寺拳法連盟、1955）．70-72pp.
3）２に同じ、72p.
4）目野由希、王晨野、田野尻哲郎、岩谷泰之、梁鎮輝（パネル代表は目野由希）、2020年10月25日、オンライン発表。
5）達摩大師著・吉田正平訳『神通自在　霊肉修養』（広文堂書店、1920）．5p.
6）注１に同じ、「自序」1-6pp.
7）平成17－18年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費　課題番号：178049、188017）
8）上記データベースhttps：//iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/ogai/page/homeの、「陰符經解（インプキョウカイ）／（明）焦竑撰」の画像解題による。
9）『老子の新研究』（大阪屋号書店、1926）．『秘境雲南』（中文館書店、1944）など。
10）日本近代文学会オンラインパネル発表「鷗外と露伴の道教――受容過程の謎を考える」（目野由希、王晨野、田野尻哲郎、岩谷泰之、梁鎮輝、2020年10月25日）の岩谷泰之パネル発表「1910年代における日本の道教についての言説」による。
11）注１に同じ、ルビ除く、32-37pp.
12）これは、1920年以降の露伴の道教論の特徴であり、関谷博「幸田露伴における漢学――元曲受容の近代」『講座近代日本と漢学　漢学と近代文学』（戎光祥出版株式会社、2020）他、露伴の道教への関心を明治期から一貫するとする先行研究とは矛盾しない。
13）「岡田は築地にＷさんを尋ねて、試験を受けた。素問と難経とを二三行ずつ、傷寒論と病源候論とを五六行ずつ訳させられたのである。難経は生憎「三焦」の一節が出て、何と訳して好いかとまごついたが、これはchiaoと音訳して済ませた。」（『雁』（「弐拾參」））ここで登場する素問や難経は、道教の「方義」の「醫經」に含まれる。
14）佐藤公彦『義和団の起源とその運動　中国民衆ナショナリズムの誕生』（研文出版、1999）.
15）日本の中国大陸進出に伴う、仏教研究と道教研究への関心拡大は、日本の図書館蔵書に仏教と道教に関する文献が増え、出版点数も増加していくことからもわかると岩谷泰之がパネル発表「1910年代における日本の道教についての言説」で指摘。
16）松本浩一「陰符經の諸註についての諸問題」『アジア諸民族における社会と文化――岡本敬二先生退官記念論集――』（国書刊行会、1984）.
17）栗田英彦、塚田穂高、吉永進一編著『近現代日本の民間精神療法』（国書刊行会、2019）．325p．鷗外と露伴の『陰符経』への言及やスピリチュアルな道教への関心は、『医界之鉄椎』の公刊以後である。
18）遠藤隆吉『陰符經』（巣園学舎出版部、1911）．1p.
19）岩谷泰之による、前掲パネル発表に基づく。
20）注１に同じ、98p.
21）井上順孝『新宗教の解読』（ちくま学芸文庫、1996、底本は筑摩書房、1992）、134 - 136pp.
22）注１に同じ、57p.